

佳作

宝物

鹿児島県 鹿児島県立楠隼中学校一年 屋祥弘

私が見つけた宝物。それは、これまで気付くことができなかった、けれど、とても大切なものだった。それは中学一年生になってすぐのときだった。それまではいつも友達がいなくて、毎日のように遊んでいた。学校でも人数が少ないためクラス替えもなく、またクラスのほとんどの友達が幼なじみだった。まるで私たちは家族のようだった。私はそれに何も感じることなく過ごしていた。

しかし、それが一変することになった。私は中学生になり、全寮制の学校へ進むことにしたのだ。そこは、私が住んでいた奄美大島とは離れていて、一年間に何回も帰ることができない。寮生活初日の夜はさみしく胸が張り裂けそうだった。友達のことを思い出すと涙が出てきてなかなか寝ることができなかった。

それから寮で友達ができて、どんなに疲れていて眠くても、寝る前に必ず友達のことを考えてしまっている自分がいた。皆と海や砂浜で遊んだこと。野球やプロレスをしたこと。カードゲームやテレビゲームをしたこと。私たちは、日課のように集まって遊んでいた。それが失なわれて初めて、当たり前でなかったあの夢のような時間の大切さに気付いたのだ。

そして、ゴールデンウィーク。待ちに待った最初の奄美大島に帰れる日がやって来た。四時間の移動ですら数日間のように思えた。とうとう私の乗った飛行機が奄美大島に近づき、窓からは青く澄んだ海とサンゴ礁が見えた。機体は奄美空港へ着陸して、私は階段を降りるのもどかしく、到着口へと走った。

それから、真っ先に友達に連絡をして、海岸でみんなと会うことができた。特に何か決めて遊ぶわけでもなく、いつもの場所で海をながめたり、石を投げたり、ヤドカリや魚を見つかったりして過ごした。みんなと一緒に笑っているだけで楽しかった。「それって何だろう」安心感なのだろうか。信頼関係なのだろうか。それとも奄美大島の昔から伝わる

結いの精神なのか、私にははっきりとした形として分かるものはないけど、友達って最高、と感じることができた。そして、離れるまで感じたことのないほどのうれしさを感じた。そのときぼくは、初めて見つけた。いつも近くにあった宝物を。

私は、なぜ今までいつも近くにいた、友達という宝物に気付くことができなかったのだろうか。それは、いつも当たり前のように一緒にいたからだろう。しかし、失ってからではおそい気がする。だから、これからの六年間という寮生活や学校の中では、たくさんの当たり前を当たり前と思うことなく、大切に、そして感謝しながら過ごしていきたい。